ペット飼育の利点と問題点の認識

飼育経験者と未経験者による違いと飼育への積極性による違い

○ 山田弘司

(酪農学園大学 人と動物の関係学)

キーワード: 伴侶動物, 飼育の利点と問題点, 世話への関与

Recognition on advantages and disadvantages to own animals

Hiroshi YAMADA

(Rakuno Gakuen University)

Key Words: Companion animal, Advantages and disadvantage to own animals, Involvement in caring

目 的

伴侶動物(以下ペット)の役割は、使役から精神的なきずなへと変化してきた。それに対応して、ペットに対するきずなや愛着について研究されるようになり、愛着と精神的健康との関係の研究成果が蓄積されてきた。一方では、動物の飼育には手間やリスクや好みなどの問題があり、飼育していない人や、飼育に消極的な関わりしかない人もいる。そのような態度の差には、動物飼育の利点や問題点に対するどのような認識の差が現れているのだろうか

本研究では、動物飼育の利点や問題点に対する評価を求め、飼育経験者と未経験者での比較や積極的に飼育している者と消極的な者での違いを明らかにする。

方 法

調査参加者は、293名の大学生で、男子155名、女子138名であった。学年では、1年生が242名で大半を占めた。調査は、本研究に関連する授業内で実施した。あらかじめ調査の目的と内容を説明し、調査参加は任意であることを明示し、同意を確認してから回答を求めた。

質問紙の内容は、4部構成で、第1部は「回答者のプロフィールとペット飼育経験」、第2部は「ペット飼育の利点評価」4段階評価20項目(例: 楽しみが増える, 子どもたちが心豊かに育つ, 防犯になる), 第3部「ペット飼育の問題点評価」4段階評価18項目(例: 臭いが気になる, 死が悲しい, ゴミが増える), 第4部「ペット飼育をやめる理由」4段階評価17項目(家が狭いから, 自分の時間が少なくなる, 長期間家を空けられない)であった。同意者は第1部から第4部まで回答した。実施時間は説明を含めて15分間程度だった。

結 果

上記質問紙の4段階評価の値は、そのまま統計分析に用いた。度数分析, 分散分析, 因子分析など, すべてSPSS14.0で行った。

ペット(イヌかネコ)の飼育経験は、「自分がおもに世話」が39.2%, 「家族がおもに世話」47.8%(以上, 飼育経験あり), 「飼育経験はないが飼いたい」9.9%, 「経験がなく飼いたくない」3.1%(以上飼育経験なし)であり, 飼育経験がある者が87.0であった。

飼育動物別では、イヌが53.2%, ネコ31.1%, 以下、ハムスター32.1%であり, これらが主要な飼育動物である。

ペットを手放した経験がある者は11.3%と少数であった。ペット飼育の利点評価について、全員を集計し、「とてもあてはまる」と「あてはまる」の合計割合が多かったのは、「いやされる」(97.3%), 「楽しみが増える」(92.8%), 「命の大切がわかる」(92.5%), 「愛情や可愛さを与えられる」(89.7%), 「ペットの成長に関与できる」(85.4%), 「家族がなごむ」(82.3%), 「さみしさを紛らわす」(77.2%), 「子供が心豊かに育つ」(72.3%), 「生活がうるおう」(70.2%)などであり, 14項目で50%を越えた。

一方、ペット飼育の問題点評価について、同様の分析の結果は、「死が悲しい」(80.9%), 「長く家を空けられない」(80.6%), 「お金がかかる」(74.4%)などが高い割合で、6項目で50%を越えた。

同様に、飼育をやめる理由で多かったのは、「十分に世話ができない」(68.9%), 「ペット禁止の家に引っ越し」(66.9%), 「死がいや」(61.7%), 「お金がかかる」(60.8%), 「長期間家を空けられない」(57.4%), 「医療費が高い」(54.2%)だった。飼育経験の有無で比較すると、イヌかネコの飼育経験者の方が飼育の利点を高く評価しており、「楽しみが増える」「人との会話が増える」「家族がまとまる」傾向が強かった。問題点(「長く家を空けられない」「臭いが気になる」「部屋がちらかる」など5項目)は重大視しない傾向があった。

飼育の積極性について、「自分がおもに世話」をしていた人と「家族がおもに世話」をしていた人で比較した。「自分がおもに世話」の方が飼育の利点評価が高く、4項目で差があり、そのうち「生活がうるおう」「繁殖の楽しみ」「規則正しい生活」は飼育の有無では差がない項目だった。一方、飼育の問題点評価にはまったく差がなかった。

飼育の利点評価の20項目に因子分析(主成分法)を行い、3因子を得た。第1因子は「楽しみが増える」「いやされる」「ペットと友達になれる」などに因子負荷が高く、情緒的利点因子とした。第2因子は「人との会話が増える」「お年寄りのなぐさめになる」「子どもたちが心豊かに育つ」に因子負荷が高く、実用的利点因子とした。第3因子は「防犯や留守番に役立つ」「繁殖させる楽しみができる」「ペットと過ごす」と規則正しい生活になる」に因子負荷が高く、欲求的利点因子とした。

これら3因子の因子得点を用い再分析した結果、飼育経験の有無で3因子の得点に差がなかった。一方、飼育の積極性では「自分がおもに世話」の方が、情緒的利点因子と欲求的利点因子の得点が高く、飼育の利点を実面的な面からではなく、感情的な面から評価していることが分かった。

最後に、動物種の違いを「イヌのみ飼育」と「ネコのみ飼育」の人で比較した結果、イヌの方が、「防犯や留守番に役立つ」「体を動かすことが出来る」点で評価が高く、問題点では「鳴き声がうるさい」ことを問題視しており、ネコでは、「壁や部屋が傷つく」ことを問題点と捉えている。

考 察

飼育の利点と問題点の評価傾向は反対の関係と考えられる。実施、飼育経験の有無で比較すると、経験者は利点をより高く、問題点をより低く評価していた。ところが、飼育への積極性で分けると、積極的な人は利点をより高く評価するが、問題点の評価では違いがなかった。飼育の利点の認識は積極性という個人差によって異なるが、問題意識の方は世話の有無に関わらず共有されていることが分かる。世話に消極的でも、飼育経験は、問題点の認識を低下させると考えられる。